

日蓮宗 常栄山 本照寺だより

第53号
厚木市下古沢133
TEL・046-247-1156
FAX・046-247-1156
振替・0230-7-35749
(加入者名・本照寺)
発行所
本照寺・須藤教裕
携帯090-9151-6438

日蓮聖人が亡くなって732年

お会式 おえしき

「夕方からの雨は本降り

となるでしょう」。そんな天気予報には一同、心配したものです……「ヒヤヒヤ」。しかし、夜店が店終いする時まで待ちました。「ありがたい」との気持ち一杯です。



雨の心配の中、今年は5時出発となった中分万灯奉納（例年の出発は7時）。幸いにも雨は降らず、天気にも恵まれたお会式となりました。皆さんお疲れさまでした。

■10月の第三土曜日、19日の午後2時からお会式法要が執り行われました。日蓮聖人のご命日（10月13日）に対する報恩感謝の式典です。

あわせて夜店の出店、また万灯（まんどろ）の奉納がなされます（今年は「中分万灯」の奉納をいただきました）。

■祝儀をくださった109名の方々、総代世話人関係各位に深甚の感謝を申しあげます。ありがとうございました。



お会式で支えてくださったお母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、お友達、お孫さん、おじいちゃん、おばあちゃん、皆さんお疲れさまでした。

いう字の方がいいと思うなア。「人を思う」、足りないのはこれだよ。「絆」なんて頼りない。糸が半分

「政見放送が面白いからよく見ましたよ。内容が無くても、説得力が無くても、時間の無駄ばかりで、面白かった」

「結婚しない。子ども産まない。そういう女性が多いいんだから。それでいて保育園が満員というのがわからないね」

「原発、最優先です。復興、最優先です。最も」

「大金持ちで幸福な人っていません。そこへいくと小金持ちには幸福な人が多いですねえ」

「貧乏ひまなしならいいんだよ。貧乏でひまがあると……淋しいよ」



金曜日出版 永六輔・著

■「サマをつけて患者を呼ぶならそのサマを待たせるんじゃないよ」
■「被災地で食料が無いって中継しているあとに、ペットの食事のCM流すなよ」
■「テレビを見てると、やたらにエコーだと呼んでいる。テレビを見ないのが一番エコだよ」
■「駅のポスターに『痴漢も立派な犯罪です』とあったけど……立派ですか？」
■「このところ『絆』と言う字やたらにみかけるけど『糸に半分』だよ。半分の糸を結んで一本にしようというわけかね。だったら、『偲ぶ』って

「無名人のひとりごと」。これは永六輔が編纂した本だが、今回、この中からいくつかを紹介したい。
一 永六輔・昭和8年4月生まれ80歳。
「上を向いて歩こう」「こんにちば赤ちゃん」などの作詞で有名。

除夜の鐘

「厳かな気分になって1年を思い返すことができて、にぎやかな初詣よりも子供に伝えたい」「自分が子供の頃、毎年親と鐘を撞きに行っていました。今でもいい思い出になっていますので、子供たちに

平成19年2月号から

再登場

ひとりひとりの役割

「みんな違ってみんないい」

■「金子みすず」は詩に「鈴と小鳥とそれからわたし。みんな違ってみんないい」と詠いました。また、沖正弘（沖ヨガ）は「プラスとマイナスがあって生かしかいできる。その生かしかいを平和という。両方右手だったらどうやって物を持つのか。左手と右手がびったり協力している時は、右手は右手として生きその本分を發揮し、左手は左手として生きその本分を發揮する。即ち、左手は右手を生かしているし、右手は左手を生かしている。だから平和なのである」と述べています。

■以下は森信三「現代の覚者たち」から「人はこの世に生まれ落ちた瞬間、全員が天から封書をもたらって生まれてくる。その封書を開いたら、あなたちはこういふ生き方をしなさい」と書いてある。しかし、せっかく天からもらった封書を一回も開かないまま死んでいく人が多い」

もそんな思い出を作ってやりたい」（ベネッセ調べ）。

■師走、12月31日、午後11時45分に第一鐘を住職が撞き、以後、お参りの皆さんが順次、鐘を撞いて新年を迎えます。

その後、住職は本堂にて新年のお勤めをします。本堂へのご参拝もどうぞ。暖かい焚き火や甘酒、お酒を用意してお待ちしています。

新春祈願祭とお札

■1月1日、午後2時から「新春盛運祈願祭」が執り行われます。

お檀家の皆さんはもちろん、お守りをお持ちでない方も、皆さんどうぞ新年のお目出たいで、新たなスタートとしてご参拝くださいますように。

（毎月1日の盛運祈願祭は午前9時からです）
■このたびお届けいたしましたお札ですが、「御守護札」は玄関出入り口の「外」にお貼りください。
また台所へ貼るお札「三寶大荒神札・さんぼうだいこうじんふだ」は本照寺本堂内・お賽銭箱右側に奉安してありますので、ご希望の方は本堂にてご自由にお持ち帰りください。また「日蓮宗暦」は適宜ご利用ください。

■古いお札は本堂前の「お焚きあげ箱」へどうぞ。
12月10日から本堂前へ設置いたします。本照寺以外のお札類でも結構です（無料）。
■総代世話人・聖徒団の新年会は追ってお知らせいたします。役員皆さんのご参加をお待ちしております。

お母さんに会いたい 「亡き人との再会」



篠原住職の寺は「自殺防止の駆け込み寺」と呼ばれ、20年間にわたり24時間、相談の門戸を開いている。

篠原住職の寺は「自殺防止の駆け込み寺」と呼ばれ、20年間にわたり24時間、相談の門戸を開いている。

「明日死のうと思えます……」
そんな電話が毎日3、5件、土日には10件以上もかかってくる。

今回は、月刊『寺門興隆』に掲載された篠原鋭一師の一文を、「ご紹介したい。」

NHKスペシャル

■今年の8月23日、午後10時からNHKスペシャル『亡き人との「再会」』という番組が放映された。

「科学では説明のつかない不思議な体験が、東北の被災地で次々に語られている」という事実を、NHKという公

共テレビ局が、長期の取材を経て番組を作成したことに強い関心を持って、テレビの前に座った。

「逝つたはずの人々が、ある日、悲しみの底にいる家族の前に姿を現す。決してもう戻っては来ないけれども、残された人は「元気な様子」に安心し、死者との再会で生き

『朝日新聞』試写室欄 キッチンに立った母

■各々の「再会」は、「そんなことは有り得ない」と否定できることではなく、私は「会えたのですよ……」と独り言で、涙を流した。

実は私も、仮設住宅を訪問するたびに「再会」の話は多くの方々からお聞きしている。

「母がキッチンに立つて告げてくれたのです。『湾の中、暖かい所にいるから、寒くないよ』って」
(女性・28歳)

「主人が夢枕に立って『オレ死んでねえ。すぐ帰るから

待ってろ！』って言いました。うれしかった」(女性・64歳)

「夜中、ボートと海を見てたら、死んだ6歳の長男が『ボク、和ちゃんと海の中で遊んでるんだ。楽しいよ、パパ』って笑いながら言ってくれました……。少し安心したんです」
(男性・34歳)

今も「再会」は、被災地のあちこちで起きています。理屈ではないのだ。

E子の苦しみ

■「今日もE子から電話がかかってきた。『お母さんに会いたい。お母さんにあやまりたい！』ど

一度でいいから出て来て欲しい。『ここにいるよ』っていつ知らせが欲しい

その生い立ち

て自分一人だけの幸福を願わないことだと思えます。そしてこの言葉は法華経にある「願わくはこの功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」との文言を元として、賢司が表現を変えて言った言葉だと私は理解しています。例えば、車の交通安全祈願をしても必ず最後にこの法華経の一文を唱えます。そう、交通安全祈願は「施主一人の安全」を祈るわけですが、決して「自分だけの安全」を祈らず、祈った功德が「普く一切に」及んでほしいと祈るのです。(通夜・年忌でも唱えます)

■賢治の母、宮澤イチは賢治が小さい頃から口癖のように、「人というものは人のために何かしてあげるために生まれてきたのだ」と論じていたといひます(弟、清六の証言)。

自分だけの幸せを願わず、人さまの、世界の幸せを願う、感謝の心で人のために何かしとてあげる、といった心を……人のためになることは、翻って自分のためにもなるのですから……宗教的に捉えようと……私たちが地球生命の一部なのだから、個人の幸福を願う前に「ぜんたい」の幸福を願うべき。

私利私欲と「人のため」

◆……賢治は象徴的な言葉を残しています。「世界がぜんたい幸福にならないうちは、個人の幸福はあり得ない」と。実はこれこそが法華経の精神かと。この言葉を道徳的に捉え



とる「常」に世界全体の幸福を願う」であり、それは菩薩行そのもの。更にこの言葉を言い変えれば「決して

て自分一人だけの幸福を願わないことだと思えます。そしてこの言葉は法華経にある「願わくはこの功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」との文言を元として、賢司が表現を変えて言った言葉だと私は理解しています。例えば、車の交通安全祈願をしても必ず最後にこの法華経の一文を唱えます。そう、交通安全祈願は「施主一人の安全」を祈るわけですが、決して「自分だけの安全」を祈らず、祈った功德が「普く一切に」及んでほしいと祈るのです。(通夜・年忌でも唱えます)

深夜まで明るい街。華やか

心の穴を埋めたい……

高校に進んだE子の心は日毎に荒(すさ)んでいく。疲れ切った母の顔を見るたびに家を出たいと思ひ始めていた。そんなある日。幼なじみにさそわれて仙台に出る。

編集後記

■新聞で見たある投稿。「女3人集まれば……」と、女3人集まれば……(上参照)。ほんの3人集まれば「思いあう」。そんな文字があらわな、女3人集まれば……(上参照)。ほんの3人集まれば「思いあう」。そんな文字があらわな、女3人集まれば……(上参照)。



うしたら会えますか？」
あの日から3年の月日が過ぎようとしているが、同じ言葉が繰り返される。

3・11前日の夜、高校生E子は仙台の飲食店にいた。深夜まで『ダチ』(友だち)と騒ぎ、路上で朝を迎える。そしてダチのアパートにころがりこみ寝て、夕暮れまで待つという日常……。

の3月11日、午後2時46分を迎える。とつさに出た言葉は、思いもよらぬ、
「お母さん、たすけて！」
のひと言だった。女友だちとともに無事……。

生まれ育った港町に帰るには4日間を要したが、辿り着いて見た風景は地獄。
彼女は地獄を徘徊(はいか)いしながら母を呼んだ。
「お母さん、お母さん、E子だよー！」
半年が過ぎても母に会うことはできなかった。
母の仕事仲間がE子を同居させてくれる。みんなやさしい。それだけにE子は自分を責めた。何度も母を追って海へ入ることも考えた。
「お母さん、ごめんね、ごめんね……」

■そんなE子を見かねた知人からの情報で、E子が私に電話をかけてきたのは、あの日から1年が過ぎようとしていた頃のことである。
「一度でいいから出て来て欲しい。音でもいい、風でもいい。何か『ここにいるよ』っていつ知らせが欲しい。だから私、夜、眠らない……」
電話のたびに私は、
「あなたが幸せになれば、お母さんは必ず笑顔であなたの前に現れる。本気で幸せになるんだ、いいね！」
多くの方々に再会をはたしていただきた。決して『不思議なこと』ではないのだ。

[illegible]